

## 深夜の施術室（体験版）

### 第1話 にじゅうまる

「こんばんわ」

「こんばんわ」

エレベーターの扉が閉まる。

鏡に映った男は、思っていたより大きかった。

肩幅が広い。

背も高い。

けれど、隣に立っている私とは一度も目を合わせない。

「初めまして。レイです。よろしくお願いします」

「あ……ども」

小さな声。エレベーターの端によって、大きい体を小さくして、私と距離をとっている。

私は鏡越しに男を見た。

——ほんのちょっと震えてる。

まあ、珍しくもないが、ちょっと怖い。

初めての店。

初めて会う女。

しかも、ホームページの写真だけを頼りに来ている。

期待と不安が半分ずつ。

そういう顔をしている。

「5階です」

「あ、はい」

エレベーターが止まる。

扉が開いた。

私はキャリーバッグを引きながら歩き出す。

わざと凜と背筋を伸ばして、少しでも早く歩く。

後ろから男の足音がついてくる。

ゴロゴロと、キャリーバッグの車輪の音だけが、妙に大きく響いた。

部屋の前で立ち止まり、扉を開ける。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

男が中へ入る。

私は後ろからドアを閉めた。

この手のホテルは、声が外に漏れないように二重扉になっている。

二つ目の扉を男が全開に開けようとしているが、ホテルが古くて建付けが悪いため、

全開にしても止まらずに、離すと閉まってしまう。

必死に全開にしては、止まるか確認して、を繰り返す男は、

私が自分のためだけに持ってきているスリッパを出して履くために時間がかかっていることに気づかない。

結局、一生開いた状態で止まらない扉を男が支えてくれたところを、

私が手をかけて入室した。

「ありがとうございます。」

私は少し笑いながら言った。

無言でササッと部屋に入る男。

私はキャリーバッグを壁際に置いた。

「どうぞ。ソファにお座りください」

「あ、はい」

男は言われるまま、ソファの端に腰を下ろした。

背筋が妙に伸びている。

緊張しているのが、見なくても分かる。

私はタブレットを取り出した。

「本日、初めてですよ？」

「あ、はい」

「ありがとうございます。当店のご利用も初めてですか？」

「はい」

「では、簡単に説明しますね」

いつもの説明を始める。

コース。

施術時間。

注意事項。

延長について。

禁止事項。

何百回繰り返したか分からない説明だ。

私は淡々と話す。

男は、何度も頷いている。

「ここまでで何か分からないことがありますか？」

「……大丈夫です」

「本当に？」

「あ、はい」

「じゃあ大丈夫ですね」

私はわざとニコツと笑って、タブレットを閉じた。

「シャワー、浴びてきてください」

「はい」

男が立ち上がる。

そのとき初めて、真正面から顔を見た。

エレベーターの中ではよく分からなかったけれど、思っていたよりずっと若く見える。

目が合う。

男はすぐに視線を逸らし、シャワー室へ入る。

扉が閉まった。

「……おし」

ベッドの状態を確認する。

肌触りの良いシーツ。

ふかふかのタオル。

シルクの枕カバー。

ゆらゆらと揺れる炎型の照明。

アロマ。

音楽。

ぬかりなく、細部までこだわり、完璧な雰囲気を作り出す。

部屋の照明を限界まで落とす。

白かった部屋が、薄暗く良いムードの色になる。

私は音楽を流した。

静かなヒーリングミュージック。

さっきまでただの「古臭いチープなラブホテルの部屋」だった場所が、

見違えて、ほっとリラックスできる癒しの空間になった。

シャワーの音が止まった。

数秒後、男が戻ってきた。

「はいっ」

私は、男の裸を見ないようにしながら、サッとバスタオルを差し出した。

「ありがとうございます。…え…すごい」

男がベッドを見た。

「こういう感じなんですね」

「はい」

「なんか、思ってたよりちゃんとしてます」

「失礼ですね」

「あ、いや、そういう意味じゃ……」

男が慌てる。

私は少し笑った。

「冗談です」

「あ……」

ようやく男も笑った。

男の目が、期待の目になった。

「じゃあ、うつ伏せをお願いします」

「はい」

男がベッドに横になる。

私は大きいタオルをバサッと広げ、男の体にふわっと、かけた。

「力加減、強かったら言ってくださいね」

「分かりました」

「我慢なくていいですから」

「はい」

「逆に弱かったら、それも言ってください」

「分かりました」

温めておいたオイルを自分の手のひらから肘までたっぷりと浸す。

一度、深く息を吸う。

施術を始める前には、いつもこうする。

手は合掌のポーズで、自らの五感を研ぎ澄ます。

静かに息を吐き出すと同時に、

合掌の手をゆっくりと客の膝裏まで振り下ろし、触れたか触れていないかのところで1秒とまる。

そのままゆっくりと圧を加え、

流れるように、合わせた手と手を離し、

左手は足先に向かって、右手は腰に向かって、

四指の指先でゆっくりと客の足をなぞる。

ヒーリングミュージックのテンポに合わせて、一定の速度で。

そしてだんだんとダイナミックに、肌と肌が触れ合う。

大切に。大切に。ひたすらに撫でまわすように。

得意の肘ストロークで太ももの深筋部まで届く心地よい圧。

大切に撫でているうちに、目の前にいる「お客さん」のことを、愛する対象だと自らの脳を勘違いさせる。

(大好き、大好き、大好き、大好き、大好き、大好き、大好き、大好き、大好き、大好き)

脳内を支配する。自らの指先まで愛情を巡らせて、覚醒する。

大切に。大切に。

その気持ちさが、密着した肌を通じて、まごころを通わせる。

あなたの弱い所、ひとつずつ探していく。

90分施術のぎりぎりまで、じわじわと、焦らす。

今度は、筋肉質な大きなおしりに塗った。

私の右膝から足先と足の付け根に向かって両手でオイルを塗布して、

その膝を男のおしりに、じわっとくっつけて、おしりのツボを意識しながら、

ふかーい圧を加え、体重をかける。

「レイさん、気持ちいいです。」

「あ、ありがとうございます。」

私は照れたように少し笑った。

「……ここ、結構張ってますね」

「あ、そうですか？」

「はい。すごくかたいです」

そのまま上半身を倒し、客の背中へ頭をのせる。

男は少しびくついて深く息を吐いた。

———ここから先は、製品版でお楽しみください。

本編は、レイの本性があらわになってしまう、ハラハラドキドキな内容になっています。

続きが気になった方は、ぜひ本編もチェックしていただけると嬉しいです。